

地方自治体の人間が外務省に入ってみたら…

平成28年11月

外交実務研修員 上原 健太郎

(東京都から派遣)

1 はじめに

私は平成27年4月に東京都庁から外務省に派遣されています。東京都では下水道局で5年間財政系の仕事に携わっていました。うち1年間は総務省にも出向していたので、実は今回が2度目の霞が関になります。都の上司も「あの辺よく知ってるでしょ？」…っついでいやいや外務省はお昼にお邪魔したことぐらいしかないですけどー！ちなみに外務省には洋食と和食の食堂なんかがありますが、せっかくなら各国の料理を食べられるようなお洒落カフェを作って一般にも開放したら、PR効果も高いイメージアップにも効果てき面じゃないかと思うのです。

さて、そういうわけで私は霞が関への恐怖心(?)もそれほどなく着任日を迎えたわけですが、外務省というのは、いろいろな意味で、自分の仕事のやり方を打ち砕く職場でした。そういえば、辞令交付式の前に、総務省時代の上司に挨拶に行ったところ「外務省は「霞が関の外資系」だから総務省とは勝手が違うぞ」と言われたことを、執筆しながら今思い出しました。因みに、私が最初に配属された女性参画推進室は、外務省の人間曰く、「外務省の外資系」なのだそうです(笑)。

2 女性参画推進室

女性参画推進室は、アベノミクスの3本の矢のひとつ「成長戦略」の重要課題である「女性が輝く社会の実現」を外交施策として推進していくため、平成26年度に発足

した比較的新しい部署になります。成長戦略の文脈でいう女性の活躍は、本来的には女性活躍推進法やゆう活等の国内施策であり、一見外交と女性活躍がどう結び付くのか、イメージしにくいと思います。しかし、開発協力の分野における貧困女性のエンパワーメントや女兒教育は古くて新しい問題ですし、昨今では国連やASEANといった場でも女性の活躍が取り上げられることも増えてきています。日本も、今年3回目の国際女性会議、通称WAW！

(World Assembly for Women)

を開催する等、女性が活躍できる社会の実現は世界的課題であるといえるでしょう。女性が活躍できる社会の実現を日本が主導していくという姿勢を世界にむけてPRしていくことが、女性参画推進室に課せられた重要な使命のひとつであると思います。



WAW!2015 レセプションに出席する安倍総理大臣(写真提供:内閣広報室)

また、女性参画推進室は女子差別撤廃条約を主管しており、内閣府や厚労省、法務省といった女性関連施策・法制度を所管する国内省庁を横断的に取り纏め、スイスのジュネーブで行われる条約審査(我が国の条約履行状況に関する審査)や付随



女子差別撤廃条約審査会場となったジュネーブの国連欧州本部

するフォローアップ作業の対応をしています。条約審査は基本的に5年毎なのですが、私はその条約審査を担当する貴重な機会をいただき、ロジ業務(お弁当希望の取りまとめから航空券の予約、審査を受ける際の作戦形成、資料印刷などなど)に加え、実際の条約審査の現場にも立ち会

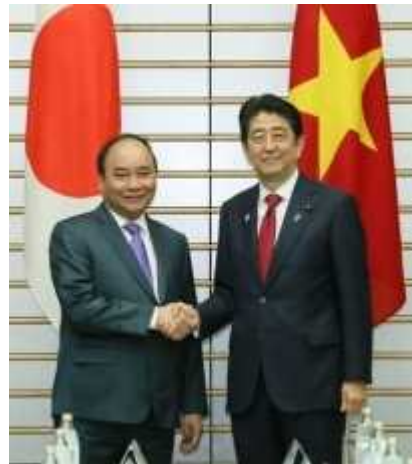
いました。審査では慰安婦問題が重要な論点の1つとなったこともあり、ジュネーブでは文字通り不眠不休で資料の印刷等の準備に当たりました。審査が終わり帰国した後も、休む間もなく国会答弁作成の嵐に見舞われた後日談もありましたが、それも本当に良い経験になりました。また、仕事柄、NGOの皆さんとやりとりすることも多く、辛辣な指摘を頂くことも多いですが、本当に多くの方が国の外交を応援してくださっているのだということを実感しました。

同室には今では男性も何名か配属されていますが、私が勤務していたときは、室長含め、私以外の全員が女性でした。着任した4月は、娘が保育園に通い始め、妻も育休明けという、私生活での大きな変化もあり本当に大変な時期でしたが、周りの皆様&先輩ママに助けられながら、何とか乗り切ることができました。女性参画推進とは言いますが、私はむしろ育児家事への男性参画を社会全体で推進することが不可欠であるということ、身をもって感じた1年間でした。

3 南東アジア第一課

2年目は、南東アジア第一課ベトナム班に配属され、二国間外交の基礎を学びながら主に広報文化案件を担当しています。外務省には、経済局や国際法局のように局を横断してあるテーマを扱う機能局と、北米局やアジア大洋州局のように各地域における二国間関係を扱う地域局があります。また、外交にはマルチ(多国間)とバイ(二国間)という概念があり、機能局はマルチ、地域局はバイのフィールドで仕事することが比較的多いように思います。1年目の女性参画推進室は機能局の一部署としてマルチ案件を主に担当し、2年目の南東アジア第一課では、基本的に日ベトナム間のバイ関係を扱う機会をいただいています。

南東アジア第一課が所管するメコン地域(タイ・ラオス・ミャンマー・カンボジア・ベトナム)は、ODA等を通じ日本とは伝統的に友好関係を継続してきました。ベトナムは日本からのODA供与相手国第1位(2014年度)であり、日本へのベトナム人留学生数も3万8882人(2015年5月時点)で中国に次いで2位になるなど、日本との関係が大変深い国の一つです。要人往来も活発であり、今年度に入ってからだけでも5月上旬の岸田外務大臣の訪越、5月末のG7伊勢志摩サミットアウトリーチ会合への出席のため来日したフック越首相との日越首脳会談、7月のASEM首脳会談で2度目の日越首脳会談、9月のASEAN関連首脳会議で3度目の首脳会談が実施されました。



G7アウトリーチ会合出席のため来日したフック越首相と官邸で握手を交わす安倍総理(写真提供:内閣広報室)

私は、要人往来の際は主に行事のアレンジを詰めたり、実際に現場で細かい調整を行うロジ業務に携わっています。ニュースでは総理の発言や会談の内容(サブスタンス)しか取り上げられることはありませんが、実際にロジ業務を経験してみて、ロジがいかに大切であり、外交を支えているかということ強く実感しています。飛行機の予約手続きに遺漏は無いのか、車は人数分用意されているか、現地で電話がちゃんと繋がるか…など当たり前なのが当たり前でできることが、ロジ業務に求められる標準であり、ロジが失敗すれば表舞台にも影響が出てしまいます。以前、「地域課はVIP用の最上級の旅行代理店たるべし」ということを外務省の同僚に言われたことがありますが、これは言い得て妙だなあとと思います。

4 リアルタイムで進む超シビアなお仕事

都庁にいたころは、作業依頼って遅くとも締め切り1週間前に撒くのが常識でしょ？
とっていた私ですが、着任早々にいきなり「本日 16 時までには要決裁」と書かれた分
厚い決裁書を処理することになり、とても驚いたのを覚えています。そう、外務省は基
本的に作業の期限が非常にタイトかつ内容がシビアなのです。部署にもよりますが、
朝来るまで何が起きるかわからず、時差もありますので、例えばニューヨークの国連
代表部とやり取りをしていけば昼夜はほぼ逆転してしまいます。我が国の国益に直
結するような事項を扱うことも多いので、国際会議や二国間会談が行われている期
間等の緊張感は大変なものがあります。

また、外務省自体が少数精鋭の組織であるため、職責以上の仕事を任されること
も多く、直接課室長からの指示を受け、自分で道筋をつけて他部署と調整し、仕事を
進めていく場面を多く経験しました。地方自治体が典型的なスタッフ組織であるならば、
外務省はライン組織といったところで、人事異動も頻繁な印象です。「外務省は外資
系」といわれる所以はこんなところにあるのかもしれませんが。

着任当初は、業務の内容もさることながら、外務省独特の決裁文の書き方も分か
らないまま他課室・他省庁と電話で議論を戦わせ、上司への説明に苦戦しつつ、廊下
にある案内板とにらめっこして決裁書を持ち込む課室の場所を確認しながら省内を奔
走する日々でしたが、今では朝「本日午前中まで」とかいう決裁書が机の上に置いて
あってもあまり驚かなくなりましたし、難しい調整のハンドリングも淡々とこなせるよう
になり、ある程度のストレス耐性は身につけてきたのかな、と自己評価しています。

5 おわりに

スーパーマンの集団か！それが、私が感じた外務省の印象です。一人ひとりの能
力がとてつもなく高い。それゆえ、自分からアピールしていかなければ助けてくれない
し、生き残っていけない組織であると感じます(笑)。もちろん、そもそも忙しすぎて周り

に気を使ってられないというのがありますが…。ある意味、個人主義的な組織ともいえませんが、それは組織が個々人の力を信頼し、尊重していることの表れに他なりません。今は地方自治体も少数精鋭で多様な業務をこなすことが求められる時代です。地方自治体に戻り仕事を進めるうえでも、将来マネジメントに携わる際にも、必ずや外務省で得た経験は糧になると確信しています。